

善意と文学 —— 語りの「丁寧」をめぐって

第18回

D・H・ロレンス

『チャタレー夫人の恋人』の礼儀作法（下）

阿部公彦

Abe Masahiko

いかに語らないかの小説

18世紀以来の「善意の文化」の中で鍵になったのは、いかに語らないかをめぐる作法だった。「慎み深さ」(modesty)と「偽り」(dissimulation)がセットでとらえられ、隠すことや黙ることが、とりわけ女性の作法の根幹をなす重要な要素とされていく。『高慢と偏見』の第6章で主人公エリザベスと親友シャーロットとの間に交わされる会話は示唆的である。女性は特定の男性に対する好意をそう簡単に示すべきではないという従来の常識に対しシャーロットは、そのようなことをしたら相手の男性はなかなか行動を起こすことができないし、そのために、うまくいくはずの関係もうまくいかなくなってしまう、といったことを主張する。¹ 言うまでもなくこの議論は、小説の先行きを予告的に示している。エリザベスの姉のジェーンは慎み深さのあまりビングリーに自分の気持ちを伝えることができず、そのために周囲から、ビングリーに対して彼女は通常の好

意以上のものは持っていないと誤解されてしまうのである。

このような「慎み深さの作法」が幅をきかせる中で、では小説の語りはどのような役割を担ったのか。むろん小説作品には『マンスフィールド・パーク』のファニーなどを筆頭に、慎み深さを徳として身につけた人物が数多く登場してきた。そういう意味では小説もまた、「慎み深さの作法」を側面から補強する役割を持ってきたとも言える。

しかし、語りには、隠されていたことを表沙汰にしてみよう、という重要な機能がある。『高慢と偏見』でも、たとえば中盤、やっと思いついて行ったプロポーズに対しエリザベスから厳しい肘鉄砲を喰ったダーシーがそのエリザベスに渡す手紙の中では、さまざまな極秘事項が一気に開示されており、物語はこれをきっかけに大きく前に進むことになる。そうした山場に限らず、この作品のあちこちで「盗み聞き」や「盗み見」が横行しているのである。とりわけ、自ら「性格分析家」を自認する主人公エリザベスは、相手の隠れた意図を見抜くことに悦楽を見出すような人物として描かれているのであり、カードに興ずる人々の会話に聞き耳を立てたり、パーティでの他人の会話を聴きとったりすることを得意としている。

¹ If a woman conceals her affection with the same skill from the object of it, she may lose the opportunity of fixing him; and it will then be but poor consolation to believe the world equally in the dark. There is so much of gratitude or vanity in almost every attachment, that it is not safe to leave any to itself. We can all *begin* freely — a slight preference is natural enough; but there are very few of us who have heart enough to be really in love without encouragement. (23–24)

もちろん、そのようにスパイまがいの諜報活動を繰り広げるエリザベスが忌まわしい悪人として描かれているわけではない。それどころか彼女の役柄は、当然表に出るべきものを私たちに代わって引き出してくれる正義の発掘者というものである。小説の語りは、そのような営為に没頭するエリザベスを側面から支援する。人前では決して口にされないようなエリザベスの心理も、自由間接話法的に彼女の気持ちを通訳・代弁する語りによって、どんどん表沙汰にされる。

こうしてみるとある時期の小説は、一方で「いかに語らないか」の作法を描出し、その価値観を補強するようでありながら、同時に、「いかに語られていないことを語るか」を至上命題ともしているのである。いかに語らないかと、いかに語るかの間の葛藤から、小説というジャンル特有の「善」が生まれてきたと考えることもできるのである。

この連載中ずっと、なぜ語ることがそれほど「善」とされるのかという問いを立ててきた。『チェスタフィールド卿の手紙』を扱った第11～12回でも触れたように、18世紀終わりにはすでに、作法に伴う隠蔽や偽善は禍々しい「悪」として指弾されていた。逆に、包み隠さずに自分の悪行をすべて言うことは、キリスト的な文脈でも褒め称えられるべき偉業とされる。「告白」は赦しのための秘蹟として、重要な意味を持ってきたのである。19世紀ロマン派の詩人も、正直に自分の体験を言葉にすることを重視した。語らないことはしばしば「悪」と結びつけられる。対して、語ることは善きことであった。

しかし、小説という形式の中では語ることの「善」に加え、語らないことの「善」もまた大きな意味を持っていた。『高慢

と偏見』に限らずこっそり渡される手紙や盗み聞きなどを通して徐々に事の真相が明かされるような小説作品は数多くあるが、そうした迂遠さにはサスペンスを演出するという側面が一方ではあるにせよ、他方、語られていないことを語ることについての、ためらいめいた引っかかりも示されていると言える。つまり、語られていないことは語られていないままにしておくべきなのかもしれないとの価値観がそこには見え隠れするのである。

不作法という作法

この点を踏まえてロレンスの『チャタレー夫人の恋人』に戻ると、いくつか見えてくることがある。ロレンスは従来からある小説の約束事を破壊しようとするかのような荒っぽさで、作中人物と語り手の間の垣根を取り去った。従来の小説では、語り手と人物の間に垣根を設け、たとえ“全知の語り手”によるものであっても、どこまでが作中人物の考えや発話で、どこまでが語り手のそれであるかをある程度明確に示していたのである。第5～6回のナサニエル・ホーソーン『七破風の家』の分析でも考察したように、これは語り手の作中人物に対する「遠慮」や「敬意」の表れでもあった。

これに対し人物の内面を勝手に代弁する『チャタレー夫人の恋人』の語り手は、いかにも不作法で無遠慮であつかましく見える。例の露骨な性表現の氾濫と相まって、作法違反は意図的なものだろう。性的な事柄に限らず、分泌物など人間の身体性を想起させる部分をなるべく隠蔽しようとするのが16世紀以降の作法の基本だったわけだが、それは自分のプライベートな部分をやたらと他人に見せない、また、他人のプライベートな

部分にも安易に足を踏み入れないというルールと呼応している(エリアスなど)。『チャタレー夫人の恋人』の語りに見られるのは、そうした「遠慮」の精神をことごとく踏みじめるような態度なのである。

では、ロレンスのこうした不作法や無遠慮やあつかましさと、語りの根本的な「善」との関係はいったいどうなっているのだろうか。次に引用するのはコニーと出会ったばかりのメラーズが、その存在を疎ましく思う様子を描写した箇所である。そもそもの発端となっているのは、メラーズの金槌の音に耳を澄ますコニーの心理なのだが、いつの間にかそれがメラーズの心理描写に移行している。これも主体間の区分の曖昧さによるところが大きい。

女は男の槌の音に耳をかたむけていた。あまり幸せな音ではなかった。男は圧迫されていた。男一人の領域に侵入があった。危険な侵入だった！ ひとりの女が入ってきた！ 男は、この人生で独りになることさえできればいいという心境に達していた。だが、自分の孤独を守る力もないのだった。彼は雇われ人で、コニーたちはご主人だった。

とくに女とは二度と触れあいたくなかった。男はそれを怖れていた。昔の触れあいから大きな傷を負っていた。独りになれないなら、独りに放っておいてもらえないなら、死んでしまおうと感じていた。外の世界から完全に引きこもっていた。最後の避難場所がこの森だった。そこに身を隠そうと思っていた！ (170)

She listened to the tapping of the man's hammer. It was not so happy. He was oppressed. Here was a trespass on his privacy, and a dangerous one! A woman! He had

reached the point where all he wanted on earth was to be alone. And yet he was powerless to preserve his privacy. He was a hired man, and these people were his masters.

Especially he did not want to come into contact with a woman again. He feared it: and he had a big wound from old contacts. He felt, if he could not be alone, and if he could not be left alone, he would die. His recoil away from the outer world was complete. His last refuge was this wood. To hide himself there! (88)

この箇所にもまさに書かれているように、メラーズがもっとも嫌うのは誰かにプライバシーを侵害されたり、心理を見抜かれたりすることなのである。ところがここでは、防御を固めたはずのメラーズの生活にじわじわと物理的にコニーが侵入しつつあるだけでなく、彼の心理にまでコニーや語り手の「言葉」が混じり込みつつあるのである。

ロレンスのこのような小説作法からの逸脱は、下手をすると登場人物に対する嫌がらせめいた働きかけとさえ見えるかもしれない。相手の領域を尊重し侵入を避けてみせるジェスチャーが善意の表明につながるとするなら、このような侵犯行為は「善意」どころかむしろ挑発的な「悪意」の表れともみなせる。

しかし、注目すべきは、このような混入の語りが作品の前半部に集中的に見られるということである。他方、コニーとメラーズの性交渉が開始され、両者が直接言葉を交わすようになると、場面の描かれ方は大きく変わる。ふたりの会話の描写が増え、その中で、これまで語り手の介在をへて描出されていた人物の心理が、より直接的な発話の中で表現されるようになる。そうしてみると、語り手による人物の蹂躪とも見えるようなかか

わり方が、後々の自発的な語りの準備となっていることがわかる。

このことを確認するために、先にも触れた第14章のメラーズによる「演説」の場面を見てみよう。引用部では、いかに自分が性的に妻に苦しめられていたかをメラーズが具体的に語るのだが、このように詳細に性行為について語ることはいったいどのような意味を持つのだろうか。

でもあいつはおれを不遜に扱った。おれが欲しい時に拒絶するようになったんだ。絶対に応じなくなって、いつも、ひどく粗暴に、おれを撥ねつけた。それで、撥ねつけられておれにその気がなくなると、甘ったるく言い寄ってきておれを食べる。おれは必ず応じたさ。それでも抱いてみると今度はおれがイク時にぜったいイこうとしない。ぜったいにだ！ ただじっと待っている。で、おれが三〇分我慢していると、相手はそれ以上我慢する。それで、おれがイッてすっかり果ててから、自分のために動きはじめて、おれはあいつが身をよじり声をあげながらイク時まで、彼女の体のなかにいなくちゃいけないんだ。下のあそこでおれを掴んで掴んで掴んでそれから大きなエクスタシーが来てイッてしまうと、ああよかったわ！ とか言う。だんだんおれはうんざりしてきて、あいつもさらにひどくなった。なんていうか、彼女はどんどんイキにくくなって行って、まるでクチバシで引きちぎるみたいにおれの下半身を引きちぎるようになった。ああ、あんた、女のあそこはイチジクみたいに柔らかいと思ってるだろ。でもな、ゴロツキ女の股間にはクチバシがあって、そのクチバシでこっちが吐きそうになるまで引きちぎるんだ。自分！ 自分！ 自分！ すべてが自分だ！ 引きちぎって叫び声をあげるんだ！ 男の我がままと言うけれども、一旦そっ

ちになびいた女のやみくもなクチバシの私の強さと比べれば足元にも及ばないさ。年取った売春婦みたいなもんだ！ そして、もう止まらなくなってしまう。あいつにはそのことを話したんだ。どんなにおれが嫌か話したんだ。(401-402)

But she treated me with insolence. And she got so's she'd never have me when I wanted her: never. Always put me off, brutal as you like. And then when she'd put me right off, and I didn't want her, she'd come all lovey-dovey, and get me. And I always went. But when I had her, she'd never come off when I did. Never! She'd just wait. If I kept back for half an hour, she'd keep back longer. And when I'd come and really finished, then she'd start on her own account, and I had to stop inside her till she brought herself off, wriggling and shouting. And when I'd gone little as anything, she'd clutch clutch clutch with herself down there, an' then she'd come-off, fair in ecstasy. An' then she'd say: That was lovely!— Gradually I got sick of it: and she got worse. She sort of got harder and harder to bring off, and she'd sort of tear at me down there, as if it was a beak tearing at me. By God, you think a woman's soft down there, like a fig. But I tell you the old rampers have beaks between their legs, and they tear at you with it till you're sick. Self! self! self! all self! tearing and shouting! They talk about men's sensual selfishness, but I doubt if it can ever touch a woman's blind beakishness, once she's gone that way. Like an old trull! And she couldn't help it. I told her about it, I told her how I hated it. (201-202)

メラーズの語りは告白の形をとっている。彼はこのような忌まわしい過去について語るつもりはなかったのだが、コニーにけしかけられて一気に堰を切ったような語りを繰り広げる。本人にとってはこれは本来不必要な告白とも思えるが、例のエッセイでロレンスが述べているように、こうした形で自分の性について語るの「善きこと」であるというのが作家の考えである。

たしかに、いやいや語り始めたはずのメラーズの語りには、いつの間にかほとんど陶酔的と言っていいほどの感情のほとばしりが生まれている。そこには怒りや怨みにかき立てられただけとも言いきれない、どこか前向きの勢いが感じられる。とりわけ引用部の、**But I tell you the old rampers have beaks between their legs, and they tear at you with it till you're sick. Self! self! self! all self!** というあたり、メラーズの言葉からはむしろ充実した力みが読み取れるが、コニーや語り手にプライバシーを侵犯され、いやいや語らされているはずのメラーズの言葉にどうしてこのような前向きさが生まれるのかあらためて考えてみると、それは年下で、女性で、上流階級の人妻でもあるがゆえにそれほど多くの性的体験があるとは思えないコニーに対し、人生経験豊かなメラーズがとっておきのことを教えるというポジションを得たことが関係しているのではないかと思えるのである。**I tell you** というさりげない挿入にも表れているように、メラーズはこの段階で「教師」として振る舞っているのである。²

² サンダースはメラーズについて次のように言っている。The gamekeeper emerges as a Lawrentian spokesman, theorizing and dogmatizing about love. (181)

このことをロレンスのエッセイの文脈に戻して言うと——彼はそういう言い方をしているわけではないのだがあえて言葉を補うと——性について人はもっと人に教えるべきだという提案が読み取れるように思う。「私が世の男たち女たちに望むのは、性についてあますところなく、完全に、誠実に、堂々と考えること」だとロレンスは言うが、この「考える」過程は小説語りの中で、一種の指南の役割を担うようになっていく。

1930年代から40年代にかけ、欧米では人々の性に対する態度に大きな変化が見られつつあった。それがもっとも目につく形で現れたのは、「キンゼイ報告書」(『人間男性における性行動』[1948])である。よく知られているように、「キンゼイ報告書」ではこれまでタブーとされていた同性愛、婚外性愛、幼児性愛といった男女の性行動について、道徳的な立場からではなく、ニュートラルな統計的な視点からのアプローチが試みられている。その統計手法の有効性についてはさまざまな問題点が指摘されてきたものの、「50%の男性は婚外関係の経験あり」「37%の男性は少なくとも一回は同性愛関係によってオルガズムを体験」「男性の92%は自慰行為を体験」といった数値の提示は画期的だった。

「キンゼイ報告書」のもたらした衝撃については、当時の保守的な作法書との比較が参考になる。ピーターセンは、セオドア・ヴァン・デ・ヴェルドによるベストセラー『理想的な結婚』をとりあげ、いかに「キンゼイ報告書」がそこから大きな一歩を踏み出していたかを印象的に示している(198)。1926年の出版以来、1948年の「キンゼイ報告書」刊行までに数百万部は売り上げていたというヴァン・デ・ヴェルドの作法書では、性そのものは必ずしもタブーではなかったのだが、著者は

「あくまで通常の性行為」のみを扱うのだとの姿勢を明確に示しており、「病的なもの」「変態的なもの」には立ち入らないと宣言している。その「変態的なもの」としてあげられているのが、たとえば「挿入前の性器への接吻」だった。そのような接吻自体が責められるわけではないにしても、万が一その結果挿入前にオルガズムに達してしまうようなことがあれば、それは「地獄の世界に足を踏み入れるがごとき変態行為だ」とされたのである。³

これに対し、「キンゼイ報告書」では「オルガズムのスピード」というようなセクションがあって(579-81)、ごく淡々と「多くの男性はオルガズムは一度きりですます」「教養のない男性は少しでも早くオルガズムに達しようとする」「教養のある男性はオルガズムを少しでも順延しようとする」「男性の四分の三は開始から2分以内にオルガズムに達する」、そして「挿入前に男性がオルガズムに達してしまうこともままある」といったような調査結果が報告されているのである。

先に引用したメラーズの告白を典型に、『チャタレー夫人の恋人』でもオルガズムのタイミングについての強いこだわりが見られるが、そこではオルガズムを地獄云々といったモラルの問題から切り離し、また単なる装飾や官能描写に終始させることもせず、議論をつくした上での技術の問題として考えようと

³ ピーターセンは次のように言及している。Van de Velde taught the world that it was perfectly appropriate to perform the genital kiss as a means of precoital arousal, but that one must stop short of orgasm or, oh God, “the hell gate of the realm of sexual perversion” would open and devour the souls of all involved. (198)

する姿勢が明確に見える。話題になっているのは、あくまで性的方法なのである。

20世紀の後半以降は、性的方法に焦点をあてる指南書が数限りなく出回るようになるが、ロレンスはそうした流行に先駆け、性について教えるというスタンスをとった。とりわけ人々が教えられる必要があったのは、行為の相手とはなかなか語り合えない問題、すなわちオルガズムのタイミングのことだったわけである。

そういう意味では意図的に不作法や無遠慮を演出する『チャタレー夫人の恋人』は、読者に対しては作法書由来の、伝統的な小説と似たような関係を保っているということになる。つまり、あいかわらず語りは読者に対して「善」なる使者のように振る舞うことで自らの存在意義を得ているのである。ただ、興味深いのは、そのような語りの「善」を行うに際して語り手が遠慮や尊重といった作法書的な他者とのかかわりのルールを遵守せず、むしろあつかましい領域侵犯を犯したり、自他の区別を踏みにじったりする、つまりあからさまな不作法にふけるということである。あらためて振り返ってみると、オースティンやルイス・キャロルにすでに見られた作法と小説語りとの微妙な関係は、ここへ来てさらなる緊張を生み出している。

『チャタレー夫人の恋人』の語りの作法は一見ナイーブなほど言葉の意味を信頼しているように見えるかもしれないが、その根にあるのはこのような作法への挑戦だということができる。読者に対し「教える」というスタンスを保つことで語りの「善」は保証しつつも、19世紀の作家たちよりははるかに過激な形でロレンスは読者という他者に対する「遠慮」や「尊重」という防護壁を取り去ろうとした。そうすることで今まで隠さ

れていたことをも含めてぜんぶ言うのである。それは登場人物や、場合によっては語り手自身のもっともプライベートで恥ずかしい部分を露出することで、読者をも領域侵犯の横行する空間に巻き込もうとする企てだったのである。次回も引き続き、この問題について考えてみたい。

〈文 献〉

*『チャタレー夫人の恋人』および「『チャタレー夫人の恋人』について」からの引用は D.H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*. Ed. by Michael Squires (Cambridge, UK: Cambridge U.P., 1993) に基づいている。前者については武藤浩史訳『チャタレー夫人の恋人』(ちくま文庫 2004) の該当箇所も併記し、後者については拙訳のみを載せた。その他の引用は以下のとおり。

Austen, Jane. *Pride and Prejudice*. Ed. by Pat Rogers (Cambridge: Cambridge U. P., 2009)

Booth, Wayne C. "Confessions of a Lukewarm Lawrentian," in *The Challenge of D.H. Lawrence*. Ed. by Michael Squires and Keith Cushman (Madison: U. of Wisconsin P., 1990), 9-27.

——. *The Rhetoric of Fiction* (Chicago: U. of Chicago P., 1961)

Elias, Norbert. *Civilizing Process: The History of Manners*. Trans. by Edmund Jephcott (Oxford: Blackwell, 1978)

Kinsey, Alfred C., Wardell B. Pomeroy, Clyde E. Martin. *Sexual Behaviour in the Human Male* (Bloomington, IN: Indiana U.P., 1975/1948)

Levine, George. "Lady Chatterley's Lover," in *D.H.*

Lawrence. Ed. by Harold Bloom (New York: Chelsea House, 1986), 233-37.

Petersen, James R. *The Century of Sex: Playboy's History of the Sexual Revolution: 1900-1999*. Ed. with a Foreword by Hugh M. Hefner (New York: Grove P., 1999)

Sanders, Scott. *D.H. Lawrence: The World of the Major Novels* (New York: Viking P., 1974)

武藤浩史『『チャタレー夫人の恋人』と身体知——精読から生の動きの学びへ』(筑摩書房 2010)

(東京大学准教授)